

---

# 彼女が好きでした。

hitomi

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

彼女が好きでした。

### 【コード】

N6828S

### 【作者名】

hitomi

### 【あらすじ】

叶わなくても届かなくても  
それでも彼女が好きでした。

本当に好きでした。

苦しくて切ない、そして残酷な恋。

もしあなたが彼と同じような立場に立つたら  
どうしていますか。

私のHPとみんなのjrpというサイトに重複投稿しています。

彼女は誰ですか。

始まりなんて知らない。

終わりなんて知らないよ。

でも俺は彼女が好きだ。

それだけは確かだ。

「愛花！。お弁当忘れてるよ」

「あっほんとだ！お母さんありがとうー」

いつもと変わらない朝。

いつもと同じ声飛び交う。

「優もほら！早く行かないと遅刻するわよ！」

「…あぁうん」

別に遅刻してもいいのだが。

母の声に追い出されるよう、のそのそと動き出す。

今日も面倒くさい一日が始まる。

玄関を出れば、いつものように姉の彼氏が姉を待っていて、「よお、優」と声を掛けられる。

そして俺もいつものように頭を軽く下げる。

これは俺が姉と同じ高校に行くようになってからの日常となった。

俺は今高一で、姉は高三。

俺が高校に入学した後に同学年の彼氏ができたらしく、それからと  
いつもの毎日その彼氏さんが朝迎えに来る。

困ったもんだ。朝からイチャイチャしているところを見せつけられ  
るのだから。

弟という存在をもっと大事にしてほしいね。

「ごめん！ケータイ忘れちゃってて」

姉が急いで玄関から飛び出してきた。

「いいよ。じゃ行こう」

彼氏さんが優しい笑顔で言う。

こうなると三人で歩いてくしかない。だけどそれに耐えられる俺ではないし、空気が読めないわけでもないので駅に着くと友達と一緒に行くからと言って二人と別れる。

そして友達も実際いるのだから嘘をついたわけではない。

「はよー」

その友達が優を見つけて声を掛けてきた。

「はよ」

優もそれに軽い挨拶を返す。

「ねえねえ今日テレビの占い見てたらさあ、俺今日一日モテモテな日みたいでさ！もう告白とかされちゃったらどーしよっ」

「…まあされたとしても今日限りかもね」

友達の陽気な声に対して冷めた反応を返す。

「親友に対して冷たくないか!？」

「別に親友だと思ってないし」

「またまたあー」

二人はホームのある場所まで来るとそこで止まって地下鉄を待つ。

一番人が集まらない場所だ。

「今日もあの人たちときたわけ?」

「まあね」

「懲りないなあー」

ケラケラと笑い出す友達。

俺だって好きで一緒に来ているわけではない。しょうがないのだ。

あの彼氏がいるおかげで、俺の大事な時間を台無しにされたくない。

だって俺はまだ

「あ、そういえばお前さ、隣のクラスの愛美ちゃんに告られたんだろ？」

あー、と面倒くさそうな声を出す。

確かそんなこともあったっけなあとおつばやく。

「おいおい、ちゃんと返事してやれよー。あの子けっこう人気ある子なんだしさ、中途半端なことすると他の男子にやっかまれるぞ。まあ今でもそうだが」

「わかってるよ。だから面倒なんだよな…」

なぜああいう女が俺のような男を好きになったのか理解ができない。

俺は別段かっこいいとか頭がいいわけでもなく、結構平凡な人間だ。

だから容姿端麗で男子に人気のある女に好かれるなどとは思っても見なかった。

でも、思い返せば中学・小学と同じような状況になったことがあるような…。

まあどうでもいい。別にそうであっても関係ない。

いつも俺の考えは変わらないのだから。



平凡な人間らしく、平凡に過ごしたい。

だからやっかいなことは避けるにこす。

だけどもある一つを除いては、だが。

地下鉄が目の前で止まって、自動ドアが開く。

他の車両より人が少ないので、二人はすっと乗ることが出来た。

それから学校近くの駅に着くまで二人で他愛のない話をした。

数学はだるいなの、担任の女教師はかわいいが口うるさいだのと。

駅に着くと学生たちでごった返した。

階段を上っていくとその上のほうに姉とその彼氏が見えた。

楽しそうに二人で笑っていた。

「なにがいいんだろうねえ」

隣にいる友達が優の視線の先に気付いたのか少し笑ったように言う。

「うるせ」

小声ながらも怒気を持った声で優は言葉を吐いた。

でも別に本気で怒っているわけではない。

友達なりに気を遣っている、それがわかっているから。

駅を出て学校へ向かう。

駅から学校まで1分もかからないのですぐに着く。

そして学校へ入り下駄箱まで来ると二人は別れる。

「じゃあまたな」

「またな、明あかり」

彼、友達の名前は明。

優と中学から一緒にいて、結構仲がいい（優は認めたくないようだが）。

だけど優は明には他の友達より色んな話をする。

例えば恋とか、恋とか、恋とか、恋とか（笑）

他の友達には恋の話など一切しないので、明には心を許しているの  
だろう。

そして絶対に誰にも言わないと確信しているから。

だって優の恋は、バレてはいけない恋だから。

本当はイケナイ恋だから。

切ない恋だから。

悲しい恋だから。

寂しい恋だから。

あつてはならない。

あつてほしくない。

残酷な　　恋だから。

優が自分の教室に着いて席に座ると、教室のドアのほうから声を掛  
けられる。

そこにはあの愛美って子がいた。

近寄っていくと目の前に来た途端いきなり、バツと優の前に紙を差し出す。

そして戸惑いながらそれを受け取ると丁度本鈴が鳴った。

そしてそれと同時に愛美もそこを立ち去っていった。

なんだったんだ…。と手渡された紙に目を通すと、そこには綺麗な字でこう書かれてあった。

“ 放課後コンピューター室に来てください。  
返事が聞きたいです。  
無理だったらここにメールして下さい。”

xxxxxxx@ . ne . jp”

… あー返事が待てませんってやつかあ。まあ…丁度いいかもな…。  
頭を掻きながらドアの前に突っ立っていると、担任の先生が教室に入ってきた。

「おーい、席に着けよー」

おしゃべりをしていた女子たちや、ふざけていた男子たちがガタガタと自分の席に移動し始めた。

そして優も自分の席に戻った。

先生の話が始まる、いつものように。

変わらない日々を、突きつけるように。

優しく、時には鋭く、優の心を締め付ける日々。

告白されたことでさえ、優にとってはあまり変化の対象にはならない。

だってそれより衝撃的な毎日を、彼は過ごしているのだから。

きっと誰にもわからない。

当人でしか理解できない心情。

「助けて欲しい」と叫んだとしても、最後に助けるのは自分だと気付いている。

だからどうしようもない。わかっているんだそんなことは、と。

優を助けるのは、優しくない。

でも。

でも。

でも。

でも。

でも。

……好きなんだ。

彼女のことを好きだと気付いたのはいつだろう。

わからない。

ただ彼女の後を追いかけて、彼女の笑顔が見たくて、ただただ一生懸命頑張っていた。

あの頃。あの頃の自分。

素直で純粹で、愚かで滑稽だった。自分。

いや、今でもそうか。

まだ思い続けているのだから、変わらない。

ほんとだ。全くもって変わらない。

素直で純粹だったところはどこかにいったかもしれないが、その他はそのままで。

そんな自分を笑ってしまいたくなる。

わかっているのに。わかっているのに止められない。

人の感情というものは本当に面倒くさい。

始まるのも自分勝手、終わるのも自分勝手。（いや、感情勝手というべきか）

自分でどうにかコントロールできるものもあるが、消えてなくなるわけじゃない。

消える時はいつも、予期しない時に消えている。

だからもう、この感情に反発するのは止めた。

自分が更に苦しくなるだけで、なんの解決の糸口にもならない。

もうなるべく自分の好きなようにして、自然に消えるのを待とう。

そう思っていた。そう思っていたのに                   あの男が邪魔をする。

あの男。彼女の彼氏だ。

わかっていた。彼女が俺のことを好きじゃないことぐらい。

だけど、いきなり彼氏ができるなんて思わなかった。

彼女はそれなりに可愛い顔をしているし、別に彼氏がいてもおかしくなかった。

だけど今までずっといなかったし、好きな人がいるような素振りも見せなかった。

なのに、なんでだ。

隙を突かれて俺は、俺は、俺は、もうこの感情を抑えることは出来ないと感じた。

今までずっと好きだった人をとられたことに対する怒りと嫉妬で、全てを滅茶苦茶にしてやりたくなった。

だけどその時、優の感情を止めるように携帯が鳴った。



相手は明だった。

優はその時の気持ちを明にそのまま話した。

そしてその時初めて好きな人がいること、それは誰かを話した。

もう誰に話してもいいと思っていたのか、明だったから話せたのか。

多分後者だと思っが。

そして明は全てを聞いた後、こう問いかけた。

『お前は どうしたいの？今の思いのまま行動したら得るものってあると思っ？』

……ある、はずがない。

優も心のどこかではわかっていた。でも、それより強い感情に支配されて見えなくなっていたのだ。

明の言葉に少し落ち着きを取り戻したが、でもまた感情が暴走しそ  
うで怖かった。

だからその日は明の家に泊まることにした。

明も落ち着くまで家においていいと言ってくれた。

その時の明の優しさに、優はとても感謝している。

バカな間違いを起こさずにすんだからだ。

大分気持ちが落ち着いたら、優は家に帰った。

でも、彼女と顔を合わせたら、またあの感情が強くて出てきそうで怖かった。

だけど彼女がいつもと変わらず笑顔で「おかえり」と言うから。

優もつられて「ただいま」といつものように言うことができた。

そしてまた彼女との日々が始まった。

今度は前よりも辛い日々だけど、それでも好きな気持ちは止められないから、今の関係を壊さないように優は慎重に行動している。

彼女に気付かれないように、彼女を悲しませないように、ただ優しく、見守ろうとしている。

自分が辛くても、これはしょうがないからと言いつけながら。

彼女が自分に振り向いてくれるなんてことは有り得ないし、絶対にない。

だから俺にできることは彼女の幸せを願うことで……なんて、本当に思っていないけど。

そんな簡単で良い子ちゃん心ではないので無理なことなんだが。

でもそう思えたらいいなとは思っ。

そしたら楽なんだろうな。

こんなに、苦しむこともない。

そして彼女じゃない他の誰かを好きになることができれば。

それがまた叶わない恋でも、その方がきつとずっと、いいんだろうな。

彼女は近すぎるから。距離が。

だから苦しみが多くて辛い。

彼女が彼女でなければよかった。

彼女がただのクラスメイトだったり、幼馴染であったり、どこかで一目惚れした相手なら。

そうしたらきつとずっと。

こんなにも葛藤しなくてもすんだはずだ。

もっと素直に、自分の気持ちを受け止められたのに。

彼女が彼女でなければよかった。

俺はいつもそう思う。

何回も、何十回も、何百回も。

彼女が彼女でなければよかった。

彼女が俺の

“姉”でなければ。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6828s/>

---

彼女が好きでした。

2011年10月9日00時56分発行